音函

西原　正

目次

冬の光
こきん
踏切
魚子薔薇
雷
草の音
時折、白
温かい雨
散髪
ダリア畑

冬の光

鳥の背だけに光が乗っている日に
殺されたあなたを弔った

冬よりも冷たい鋪道を供物が埋め尽くし
祈りが光を孕んだ露となって
降りつもっていた
そこに光がとどまり続けることを
知らぬうちに選んだ人たちの背中に
光が静かに乗っていく

私はその列に続いた
息はみな白い形を結んでいく

こきん

＃１親指

　葉子が電話を肩に挟んでメモをとろうとしている。わたしは居間のテーブルの向かい側で文庫本を読んでいた。葉子は右手でペンを持ち、左手でメモを探して、電話器の近くに置く。わたしはその動作から目が離せない。葉子が五歳の時から、わたしはあの子の指の動作を目にするたびにそうなる。今ではもうなんの不自由もないというのに。

　ピアノを自由自在に弾くことは小さい頃からのわたしの夢だった。その指から美しいメロディーを紡ぎだす先生に憧れ、合唱コンクールでピアノ伴奏する同級生には嫉妬した。わたしの「ピアノ」は残念なことにかなわない夢のままで終わったけれど、自分の子供にはぜひやらせたいと願っていた。
葉子は小さい頃から負けず嫌いの活発な子だった。公園では、静かに遊ぶ女の子たちには加わらず、男の子たちと駆けまわって遊ぶような子。そして何事にも全力で取り組み、頼まれた用事でも子供同士の遊びでもとにかく手を抜かない子だった。途中で自分から投げ出すことは一度もなかった。
これならできる。
ある日わたしは、確信を持って葉子を近所のピアノの先生の家に連れて行った。葉子は外で遊べなくなったから少し不機嫌で、まるで頼まれ事をこなしているときのような顔をしていた。
先生は葉子をピアノの前に座らせて、葉子の指を鍵盤の上に置いた。その指を持ってぽろん、と一音。もうひとつ、またもうひとつと音を続けていく。やがてひと繋がりの綺麗なメロディーができあがった。
「葉子ちゃんピアノ面白い？」
葉子は黙って頷いた。
ピアノを習うことが決まった日から、葉子は紙の鍵盤を机において、一生懸命指を動かす訓練を始めた。一事が万事そのような子だった。
　ピアノが我が家に来てからは、さらに練習に熱中していった。わたしはわたしでいつも傍らで励ました。それはそれでよかったのだけれど、やがて葉子の致命的な弱点が露わになった。親指の関節の不具合だった。付け根の関節がすぐに外れてしまうのだ。ピアノの先生がすぐに気がついた。
　…あまり無理なさると、指関節が壊れて元に戻らなくなる怖れがあります。だから…

　そのことを葉子に告げるのが怖くて、わたしはずっと黙っていた。その上、先生の指摘にもかかわらず葉子のピアノは日ごとに上達していったから、これは大丈夫、先生の言葉は大袈裟なもの、と判断していた。
　ある日、葉子は帰宅すると、いつものようにピアノの練習を始めた。ところがどうも様子がおかしい。何小節か弾くと止まり、また何小節かで止まる。
「葉子どうしたの？」
「おかあさん、指広げたら、こきん、ていうねん」
ちょっとみせてごらん、と言いながらわたしは葉子の右手をとった。少し腫れているように見える。さすったり指を曲げたりしてみた。
「また、こきんていうた」
　葉子が顔をしかめた。だけどわたしにはその音が聞こえない。
夕食の時、葉子は左手で支えないと箸を持てないほどだった。わたしは自責の念にとらわれていた。この子が絶対に泣き言をいわないのをいいことに無理をさせていたのだ。

　どちらにしてもピアノの練習は一時中断することとし、翌日、形成外科医を受診した。医師は根本的に治すには手術が必要だという
「しかしですね、随分と細かな手術になります。針のような細い器具を使うんですよ。
　で、もし神経に触れたり傷をつけたりしますと、親指の関節は一生動かなくなることもあります。ピアノを止めてこのままであれば日常の生活にほとんど支障はありません」
　葉子は顔を上げ、なんだか嬉しそうな表情をしている。
「先生」　わたしは背筋を伸ばして尋ねた。
「もし先生のお子さんが葉子と同じ症状でしたら、先生どうなさいます？」
　医師は苦笑いしながら一呼吸置いて言った。
「手術はさせませんね」
　私は即座にピアノを断念させる方を選び、まるで逃げるように葉子の手を引いて帰ったのだった。
　それからわたしたち母娘の夜毎の日課は手のマッサージになった。心をこめて、だけど力を入れ過ぎないようにわたしは葉子の右手の親指をさすり続けた。
　長い時間はかかったけれど、今、親指の関節は正常である。

　今、思えばあの時、こきんと音がして良かったと思う、音がしないで葉子が頑張り続けていたら、ピアノはおろか字さえ満足に書けなくなっていたのかもしれないのだから。またピアノをあきらめてから葉子の顔色がとても良くなったのをわたしは見逃さなかった。ピアノを始める前のように、葉子は本当に楽しそうに野外で遊んでいたから。
　やがて葉子の興味は「ものを作ること」と「絵を描くこと」に移行した。スケッチブックは葉子の必需品になり、彼女が写生してきた水彩画は我が家の居間を飾っている。
そして、大学の建築科へ進学。卒業後、建築土木の会社に就職。工事現場に出ている。男勝りの仕事だけれど葉子は生き生きとしている。そう、今あの手、あの指が今では荒っぽい現場で活躍しているのだ。事故に遭いませんように。母親としての気がかりはそれだけだった。

＃２　押し絵

そんな葉子が最近辛そうにしている。いつもなら現場で起きたこと、見たことを食事の時に、よく話してくれるのだけれど、烏丸通りでの地下鉄工事を受け持ってしばらくしてから急に無口になった。目の下に隈までできている。それは葉子がこれまで経験したことのない大工事のようだった。だからだろうか。
いつもの涼しい表情ではない。だけどわたしには憶えがあった。それは指の痛いのを必死にこらえていた子供の時の顔である。あのピアノを無理にでも弾こうとしていた葉子の顔である。

「葉子無理してへん？最近、顔色が悪いけど…」
ある日曜日の朝、休みということもあって午前十時ごろにダイニングに現れた葉子に珈琲をすすめながらたずねてみた。
「ううん、もうだいじょうぶ」
そう言えば顔色も幾分、よくなっている。
「なんかあったん」
「うん、そのうち新聞に出るやろから、もうゆうてもええかな…」
「なに」
「烏丸通りをずっと掘ってきて、それで今、いよいよ御所の横を掘っているんやけど…。ほら、京都いうたらどこ掘って

もなにか出てくるやん。江戸から安土桃山、室町、平安…ってずっと層になってて…。今までやったら何が出てきても驚かへんかったけど、今回だけはさすがに参ったわ」
「御所やから？」
「ううん、烏丸通りの丸太町から出水のあたりは旧の二条城やったんよ。信長が造らせたんやね。その遺構が出てきたねん」
　喋るに従って葉子の顔が引き締まってきた。
「安土桃山の頃の宣教師フロイスの日記が残っていて、それにこの城を造った時のことが書いてあるんやけど、それがそのままでてきたんや」
　葉子は珈琲を一口、啜った。
「埋まっていたのは石垣なんやけど、その石が首を飛ばされたり斜めに切られたお地蔵さんやねん。五輪の塔とかもあった。それが地下からぞくぞくとでてきたん」
　声が震えていた。

　多数の石像を倒し、頚に縄を付けて、工事場に引かしめたれば、都の人偶像を崇拝すること大にして、異常の恐怖を懐きたり

（フロイス『日本耶蘇会年報』より）

　掘削現場から音が消えた。作業員の誰もが手を止め、息を呑んで黒い石の塊の連なりを見ていた。慎重にうすく土を削っていたパワーショベルが、がりがりと音を立ててその造作物の上を擦った時から工事の全てがとまった。
　現場監督は作業員に、ただならぬ物体付近を慎重に手掘りするように指示を下した。
　葉子も現場の補佐としてその場にいて、その石たちを見ていた。それは異様な光景だった。たぶん大至急、城を作る必要があったのだろう、石垣に使われているのは、そのためにきちんと整形されたり切り出されたものではなく、かつての庭石であったり、あきらかに石灯籠の上を切り飛ばしたものであった。そしてその場の誰もが息を呑んだのがおびただしい数の小ぶりな地蔵だった。頭を斜めに切り飛ばされたり、首から下のないものもある。
　作業員がスコップで大まかに土をはらい、軍手でその顔の土をぬぐってやる。するとその顔がきらりと輝いた。光を浴びたのは数百年ぶりであろう。葉子は土留めの位置を確認しながら梯子で下りていった。その斜めに切られた切口を見ただけで、耳の中で石が砕けるような「こきん」という音がした。
　動悸が激しくなった。
　（空耳やわ）
地下の地面はしっとりとしていて、地蔵の一つにそっと触れてみると石は驚くほど冷えていた。目を上げると年老いた作業員が人目もはばからず手を合わせている。
　京都のどんな小さな町内にも地蔵尊があり、夏にはその小さな祠の周りで地蔵盆がある。この街に生まれたものならば誰もが小さいときから親しんでいる地蔵が、石垣の代用品としてかき集められ、積まれ、破壊され、そして忘れ去られていたのだ。葉子はあまりに無惨だと思った。
　ほどなく埋蔵物の研究員が到着。彼らが調査に着手すると、それが完了するまで工事はできなくなる。たぶんいくつかは保存されるだろう。しかし…と葉子は現場を見まわした。原型をとどめないほどに壊されたものは保存のしようがないし、あまりに大規模なために撤去できない。ほとんどはこのまま埋め戻されるだろう。それこそこの烏丸通りが地蔵たちの安置場所となるのだ。

　葉子はふと足もとの丸い石に気をとられた。思わずその拳ぐらいの石を手に取ってみると、埋まっていた地面に押し絵のような顔が見えた気がした。にこやかな丸い地蔵の顔…と思った瞬間それは消えていた。石を見た。削れたのか元々なのか石にはなんの造作の跡もないようにみえる。

　ただの丸い石だ。
「すみません」
　葉子はその石を持って埋蔵物の研究員のところへ歩み寄った。
「これってお地蔵さんの頭部でしょうかね」
研究員は石を受け取るといろんな角度から検討してこう言った。
「うーん、ただの石ですね。大きさが地蔵さんの頭ぐらいですけどね。残念ながら」
　葉子は黙って頷くとその石をポケットに入れた。
　（あの音はなんやろ。そんなん、聞こえるはずないやん。）

「その石、見たい？」
「あんたそれ家にもって帰ってきたん？」
「うん。『石』やからかまへんの」
わたしは葉子にその石を見せてもらうことにした。
　石は葉子の部屋の机に、白い紙に載せておいてあった。
「石をのけた時の表情が忘れられへんから同じように置いてみたんやけど…」
　わたしはその石をじっと見つめ、そして葉子の顔を見た。
「とってええ？」
「ええよ」
　わたしは拳ぐらいの石をそっと握り、まっすぐあげた。白い紙が石の重みで微かにへこんでいて、それがふわりと戻ろうとした。
「うーん、顔はわからへんね。そやけど土の中で４００年近く埋められてたんやから、その圧力ってすごいやん。ほんの微かな『皺』でもそういう具合に、写し取られ…」
「どないしたん？」
「うん、こきん、て音が聞こえたような気がする」
「え、お母さんにも聞こえるんや」
「葉子、大事にしたげよ、この石、たぶんお地蔵さんやったんえ。きっと、こきん、ていうのはお地蔵さんの…痛い、いう声やわ」
　明日はふたりで紙屋さんへいく。重さに敏感で丈夫な和紙を探しにいくのだ。飾り棚の上に小さな座布団を敷き、その上に和紙、さらにその上に石を置くことにした。二人で一種の押し絵を作ることにしたのだ。ただ石の重さを紙が受け続ける、いつできるかわからない押し絵。どうしても地下の一瞬が忘れられないと言う葉子の提案でそうした。
　何かが写って入ればいいし、写ってなくてもかまわない。それよりもこんど石を持ち上げる時、その時にはもう「こきん」と聞こえなくなるほど鎮まってくれていれば。
　そう思っている。　　（了）

●発掘されたお地蔵さんのの一つ。現在は京都市洛西ニュータウンの竹林公園にあります。

踏切

朝は遺跡、踏切こそ
繰り返し踏み固められた重さに
時間が破れている
静かな二筋の鉄の版、日々は
落ちてこない空とレイルの間の
いちまいの版画
削られる時間は赤い鉄粉に染まり、人の
眼を鎮めては立ち尽くさせて、鳥が
いちばんに切る、踏切の朝
緑の滴が落ちて鉄の眼が開いた

魚子薔薇

　早春の朝の光は、まるで水を含んでいるようだ。空気は澄み切っていて、すべての植物はしっとりと濡れて輝いていた。
団地のとあるベランダでも、黒いワイヤースタンドに据えられたいくつかの木箱の中でハーブ類が輝いていた。
　ガラス戸の向こうから母親らしき女性のくぐもった声がして、戸が開け放たれた。出てきたのは白いトレーナーにジーンズのスカートをはいた幼い女の子だった。自分のではなく大人用のサンダルを足全体で持ち上げるようにしてつっかけ、ハーブの箱のところまで歩み寄ると、小さな声でオマジナイを唱えだした。
「みんとしゃんろけっとしゃんばじるしゃんうーーんとおおきくなぁれ」
　手に持った赤い金魚の形をしたジョウロから水を根元に注いでいく。カラになるとパタンパタンパタンとガラス戸の向こうに戻り、ジョウロを水で満たして戻ってくる。今度はベランダの右隅に大きく場所をとり、こんもりと繁っている植物の根元に水を注ぐ。そしてここでも植物に声をかける。オマジナイであるかどうかはわからない。
「ななこしゃんはきれいだねぇ」
「ななこ」と呼ばれた植物にはたくさんの花芽がついていた。

　夜のバスターミナルは、いちめん黒く輝く池のようだ。潤一はバスを１本やり過ごしたあと、待っている列の先頭に立ち、目の前に現れたがらんどうのターミナルを見ながらそう思った。そういえば団地にも小さな池があった。「池」に映る夜の光。この私鉄駅前の「バスプール」だとネオン、団地では家の灯りだ。奈々子も池の周りで遊んでいるのだろうか。自分が不在の昼間、今年で三歳になる奈々子はどうしているのだろう。バスを待っている間、潤一はその想いを募らせていった。
　まるで深海魚のように、団地を循環するバスが滑りこんできた。バスを一便やりすごして受け取った紙袋を体の正面に持ち、潤一は運転席横のシングルシートにすわった。袋の中には小さな苗が入っている。潤一は混雑でその苗を少しでも損ないたくなかったのだった。
　きっかけは偶然だった。潤一は巨大な印刷工場で働いている。そこでたまたま刷っていた、大きな園芸店の通販カタログの色むらをチェックしていて「魚子薔薇」という名前に出会ったのだ。色を見てみると白い五枚の花弁で、先だけがピンクのぼかしのようになっている。とても普通の「薔薇」には見えなかった。さらに、潤一は写真に添えられた説明文に引きつけられた。
…ななこ？…。

　「魚子」と書いて「ななこ」と読むのだ。「ちいさい」という意味なのかもしれない、と潤一は考えた。たしかにその花は小さくて弱々しく見える。説明書きによれば、薔薇の原産地の一つ中国から大阪の商人の手によって日本にもたらされた薔薇があるという。それは現在「ナニワノイバラ」という名前で流通している。その「ナニワノイバラ」をベースにして作り出されたのがこの「魚子薔薇」だという。できたのは江戸の中期とある。

　そのカタログの違うページには「ナニワノイバラ」も紹介されていた。差は歴然としていた。強い緑とでもいうのだろうか、ナニワノイバラのほうの葉は艶めいていた。そして真っ白な花。ハイブリッドティーやオールドローズなどのヨーロッパスタイルの薔薇を見慣れた目にはとても薔薇とは言い難い。しかし、もともとの薔薇はこういう花だったのだ。シンプルで明るさと逞しさを感じさせるナニワノイバラに対して魚子薔薇のほうはいかにも日本的だ。微妙な色のぼかしかたも、繁り方も。そして四季咲きだという。
　同じ薔薇でもここまで個性が違う。まるで別の植物と見まがうばかりに。
「ななこ、か」潤一は娘の名前を呟いていた。

潤一は妻の信子がベランダでハーブ類を育てている姿を思った。毎朝、ダイニングテーブルで珈琲を飲んでいると、ベランダで丹念に世話をしている信子の柔らかそうなお尻が見える。たいていは眠っている奈々子も、日曜日などは信子の傍らに立ってなにやら葉を触ったり土をいじったりしているようだ。潤一はその姿が好きだった。そして娘と同じ音の名前を持つ薔薇をその横に置きたいと、その時思ったのだった。
通勤途中にある園芸店で注文し、２週間で手に入れた。信子にはもう言ってある。

「まさか、そんな名前の薔薇があるなんてね。ほら薔薇って皇室関係の名前とか、外国の女性名がほとんどでしょ。まさか奈々ちゃんと同じ名前の薔薇があるなんてね」
夫から聞いたその日から信子はインターネットで「魚子薔薇」を検索し、育て方のメモをとると、ベランダの右隅あたりに新たにワインの木箱を置く準備を始めていた。

とっぷりと闇の降りた団地の同じバス停で降りた十数人は、まるで蜘蛛の子を散らすように一瞬で各棟へ散開していく。真四角の暖色系のいくつもの灯りが帰宅を待っている。潤一は少し急いで家に向かった。家に着き扉を開けると奈々子がかけてきた。苗を信子に渡し、奈々子を抱き上げる。
「かわいらしい苗ね。でもほんとに『薔薇』には見えないわね…。綺麗に咲かせるわよ」
「奈々子はどうだった」
「うん、元気よ」
奈々子はきゃあきゃあと笑っていた。
翌日、潤一が出社した後、家事を済ませた信子は薔薇の植付け作業を始めた。カタログには半つる性と書いてある。小さな格子のフェンスを補助に使い、こんもりと繁らせる計画である。ちいさな葉も茎もとても頼りなげで、果たして育つかどうか少し不安を覚えるけれど、とにかく陽射しはある。風もある。私が見てあげればかならず花は咲くはず。信子はそう思いなおして盛った土を固め、水をたっぷりと与えていった。横では奈々子が母親の手元を見ながらちょこちょこっと手を出している。土を触れば土を、苗を触れば苗にそっと触れようとしていた。そうして植え込みが終わると信子は毎日欠かさないオマジナイを唱える。
「ミントさんバジルさんロケットさん元気に育ってね。今日からはななこさんも仲間入りね。ななこさんも元気に育って」
奈々子は首を少し傾げて、母親の呟きを聞いているのだった。信子は、聴きながらそっと薔薇の苗を撫でている奈々子を、たまらなくいとおしく思った。
…この子は植物が大好き。とても優しい子。だけど…
「だけど」
その言葉の先を信子は飲み込んだ。それを口にすれば世界が壊れる気がほんとうにした。自分と潤一と奈々子の三人で、とにもかくにも日々つくりあげている生活そのものが一瞬にして崩れてしまう気がした。そんな言葉を脳裏にうかべた自分の気持ちを責めた。信子は防水エプロンをはずし奈々子と部屋に戻ると、一緒に手を洗い、急いで奈々子の前に坐る。
「奈々ちゃん、あの『はっぱ』もななちゃんですよぉ」
信子は奈々子を抱きしめた。ぐうぅっと言って奈々子がしがみついてくる。顔を覗きこむと嬉しそうに微笑んでいる。
「ななちゃんはいつでもごきげんでしゅねぇ。さあ、奈々ちゃんお話しましょ」

信子は夕食の買い物に出かけた。午前中にだいたいのメニューを決めて、冷蔵庫をチェックしメモを書き出す。早ければお昼前、そうでなければ奈々子がお昼寝をした後、午後三時ごろには団地の中央にあるマーケットへ出かける。もちろん奈々子も一緒だ。
団地は外周を、計画された幅の広い道路が円環状に取り巻いているのと、縦断と横断のまっすぐな道が一本ずつある以外は、人が歩く程度の細い道が各棟の間を網の目のように走っていた。住民の殆どはその細い道を利用している。

団地ができてから三十年以上が過ぎ、並木のケヤキや桜も、棟の前に植えられている椿やツツジも立派に成熟していた。また、それ以外の地面はリュウノヒゲという濃い緑の細長い草がびっしりとはえていたから、人々はさながら緑の海を歩いているようだった。

少し歩くと信子は声をかけられた。同じ棟に住む小沢さんである。小沢さんには奈々子より一つ年上の裕樹君という男の子がいる。目がくりくりっとしていて、いつも走り回っているような子だ。
「あ、こんにちは。お買い物？」
「こんにちは。そうなんですよ。奈々ちゃんもお買い物？」
小沢さんが奈々子を覗きこんで言う。
「奈々ちゃん『こんにちは』は？」
信子は奈々子のかわりに、決まり文句で答えた。奈々子は唇をきっと結び固い表情のままだ。じっと黙っている。
「ままー」
裕樹君は興味津々といった顔で奈々子を覗き込んでいたけれど、なんの反応もしないとみるや、母親に先に行こうと急かし始めた。
「これ、裕樹。少しは奈々ちゃんを見習いなさい。すみませんねぇ。もう落ち着きがなくって」
そう言いながら小沢さんは先にマーケットのほうへ歩いていった。それを見送りながら信子は胸のまんなかあたりで、じゅっと音がしたような気がした。
…いや、そんなことはない。自分でそんなことを決めつけてどうするの…
信子は小沢さんが奈々子を覗き込んだ目を思った。
…あの目、あきらかに「可哀相に」といっていた。でも、その裏にはうちは違う。よかったという安堵があるに違いない…
だけど、と信子は思う。そんなふうに感じるほど私はこの子を信じていないのかしら。いやそんなことはない。「私たち」は「私たち」できちんと暮らしているのだから。しかし、あの目…。
信子は冷静に自分の感情をのぞきこんだ。
結局、悔しいんだ。悔しい？何が？うちの子が、うちの子が…。何故、悔しがる必要があるの。駄目。あの子の力になれるのは「わたしたち」しかいないんだから。

夜、奈々子はもう寝ている。信子は潤一に昼間感じたことを話した。
「小沢さんが悪人だなんて思わないの。ただ、彼女のそういう『動作』をみただけでそう感じてしまう自分が情けなくてね。大丈夫、大丈夫と思うんだけど、正直、不安が顔をもたげてきて、くたびれたと思う時もあるの」
「不安なのはわかるよ。不安に振り回され続けているのもいやだろう。検査を受けてみるか」
「検査ね。どこかに具合の悪い所がないかって」
「うん、問題が明瞭になるのならその方がいいだろう。それに奈々子にではなく、ぼくらに問題があるのかもしれないし」
「わたしたち？」
「そう」
「何故？わたしたちに落ち度でもあるっていうの」
「いいか、信子。事実として奈々子は言葉を使ってコミュニケーションをとらないんだ。これは普通じゃない。あらゆる可能性を考えるべきだろう」
信子はこらえていたものが壊れたようにまばたきもせずに泣きだした。潤一は声を落とした。
「たしかにぼくは一日中仕事で家にいない。育児のことも家事も君に任せきりだ。君のことだから一生懸命やってくれてると思う」
信子はふっと立ちあがるとお茶をいれにキッチンにいった。お茶が入るまで二人は無言だった。
「ぼくもあまりにも楽観的過ぎたのかも知れない。いろいろ周りの人にも聴いてみるし、なんでもやるよ。だから、とにかく問題の根っこをはっきりさせようよ」
テーブルの上にぽたぽたと信子の涙が落ちて溜まっていた。

「わかった」消え入りそうな声だった。
「わかったわ。だけど検査はちょっと待ってちょうだい。今、『お話しましょ』って毎日ずっとやってるの。私の直感なんだけど奈々子の中で何かが動いているような気がするから」
「奈々子は何か言えるの？」
「あなたが聞いてるとおりよ。ママとパパ」
「時々思うんだけど、それだけじゃ駄目なのかな。三歳で…ぼくはどうやって言葉を覚えたのかまったく記憶が無いんだよ。いったいどうやって『とうさん』『かあさん』って覚えたのか全然記憶にないんだ。それに何歳からかもわからない。だけど誰かが教えてくれているんだよね」
「わたしは母に教えてもらったの。最初にしゃべった言葉」
「なに」
「でんき」
「へぇ」
「たぶん天井を見てたんでしょうね。それから二語でしゃべるようになり、語彙が爆発的に増え出して、好き嫌いを言い出して、人の名前を覚え、それぐらいから『なぜなぜ攻撃』を母にしたんじゃないかと思うの」
「ぼくにはそういうのがないんだ。しゃべらない子だったから」
「どうして？」
「今思うと恐怖だよ。父は仕事で家にいないし、離婚していたからね。家には軍隊の将校だった祖父と祖母しかいなかった。とにかく祖父が怖かったんだ。体も弱かったしね」
「あなた絵本ばかりみてたんでしょ」
「覚えてないけれど、そうらしい。だけどなんで？」
「奈々子ね、絵本が大好きなのよ。ほっといたらいつまででも見てる」
　信子の涙は止まっていた。大きな目の下には隈ができている。信子は懸命に頑張っているんだと思うと潤一はたまらなくなった。手がすっと伸びて、信子の髪を撫でていた。
　潤一と信子はもう一度、現状を整理していった。
　不明瞭ながらも覚えている言葉はふたつ。パパとママ。もっとあるかもしれないけれどしゃべらないからわからない。これは何？という問いかけには意味不明の返事、もしくは無言。自分が「奈々子」であることは認識し理解しているようだ。呼ぶと反応する。イエス･ノーは首を縦に振るか横に振ることで表現する。このやりかたをどこで覚えたのかは不明。あとは意味不明の声のニュアンスを信子が判断している。絵本はとにかく手当たり次第に見ている。土いじりも大好きで信子の作業に加わろうとする。信子に絵本を開いて読み聞かせてもらうのが大好き。
「やっぱり、少し遅いだけじゃないのかな」
「わたしもそう思いたい。お義母さんも『大丈夫、この子は人見知りが強いだけよ』って
　二人の間に沈黙が流れると、奈々子の息遣いが聞こえてきそうだった。
「子供同士で遊ぶのはどう」
「だめね。じっと見てるだけ。小沢さんとこの裕樹君だけがいつもかまってくれるんだけど」
　とにかく、と言って潤一は話を切り上げるべく立ちあがった。
「語りかけて、遊んでやるしかないみたいだね。ぼくも喋るよ。それに会社でもいろいろ聞いてみる」

　朝が来た。親たちが光の満ちてくる部屋の空気の中で、その日の準備をすすめていると奈々子がちょこちょこと歩いて寄っていく。
「なな、おはよう」
　潤一がおおげさにお辞儀をすると、奈々子も、ぐふぅといいながらお辞儀を返す。
「ななちゃん、おはよう」
　信子が朝食の準備をしながら、奈々子に声をかける。
　テレビからはニュースやＣＭが流れ、窓の外からは鳥の声がする。出勤していく車の音、遠くでクラクション、団地を歩く人の声、階段の足音…。親の二人は奈々子の声に耳をそばだてだしてから音に敏感になった。
「今日もいろいろやってみる」

出勤していく、潤一に信子は声をかけた。うなずく潤一にしてみても同じことだった。
「いろいろと聞いてみるよ」
　潤一を見送ってキッチンを振りかえると、テーブルの向こう、窓の外では魚子薔薇がすっかりベランダの空気にも、箱の土にもなじんでいた。

　朝食の後、信子は家事を済ませ、ハーブ類の手入れをする。そしてそれからずっと奈々子の傍らにいる。絵本を広げ読み聞かし、おもちゃで遊び、天気が好ければ散歩にも出た。
遊んでいる時、奈々子の目は輝き、見えるもの、母の言うことなんでものみこんでやろうという意欲がはっきりと感じられた。
…だから…と、信子は思う。　　…大丈夫…。
　…この子の言葉が口をつくための最後の壁はなんなのだろう。それがわかったら、それこそ粉々にして踏み砕いて、塵一つ残さず捨て去ってやるのに…。

　工場の昼休み、潤一は食堂で缶珈琲を呑みながら、もし奈々子がしゃべれなかったら、と考えて見た。最悪の状況である。
…だからといって奈々子を捨てるのか、殺すのか？生きていくんだろう。かりに奈々子が言葉を失ったままだとしても、親は全てを引きうけなければ。たとえこの先どうなろうと自分が守りきらなければ。…
潤一は大きく息を一つついた。
「花村、どうかしたのか？」
　同期入社の桜井が声をかけてきた。潤一よりもはやく結婚していて、子供が二人いる。お互い独身時代からの付合いである。
「あんまり暗い顔しているからさ」
「桜井、おまえんとこいくつになった」
「子供？」
「うん」
「上が四歳だよ」
「あのさ、言葉とかどう。問題ない？」
「う…うーん、別にないけれど。なに？子供の事？」
「おまえわかるか、子供が三歳のころどれぐらいしゃべってたか」
「いやぁ、そう言われるとどうかな。かみさんに全部任せてるからな。なんだ、おまえのところ…」
「正直いうと、奈々子が言葉を喋らないんだよ」
「全然？」
「いや、パパとママは時々言う」
「いくつだっけ」
「もうすぐ三歳」
　あー、といって桜井が表情を緩めた。
「だいじょぶだよ。個人差があるからさ。医者じゃないからはっきりとしたことは言えないけどさ、…おまえ駅前の村野歯科って知ってるだろ。あいつ、同級生なんだけど、あいつは幼稚園になってもパパとママしか言わなかったんだぞ」
　桜井は、そんな村野が歯医者になれるんだ、三歳で？そんなのだいじょうぶだと言った。
「その村野ってのはなんで幼稚園までそれでいけたんだ？」
「ああ、あいつんとこは駅前の土地持ってる大資産家だろ。親父はヨットだ、ゴルフだと忙しいし、母親は財産管理に忙しい。ほったらかしにされたんだよ。で、ほったらかしでも、黙っていても御手伝いさんが全部やってくれるからしゃべる必要がなかったんだ。だからさ、息子が幼稚園で馬鹿にされたと知ってからは凄かったぜ。カウンセラーやら家庭教師やら雇ってさ。幼稚園で家庭教師だぜ」
「ほったらかしか…」

「まさか、おまえの所がそうだなんていってないよ。だからさ、六歳までそんなのでも関係ないってことだよ。大丈夫だよ」
　桜井の話は、だけど、溜息をつくぐらいの効果しかなかった。いずれにしても本人が言葉を発しなければどうにもならない。

　潤一はそうやってぽつぽつと社員仲間から少しずつ話を聞いていった。だけど娘のことに問題意識を持つということは、現実を思い知るということでもあった。なにより、子育てに夫がまったく参加していない家庭がいかに多いかということを知ったし、露骨に「障害」を口に出すものもいた。潤一は生まれて始めて「障害」と言うことばを浴びせられ、この言葉が砥がれた刃物のような鋭さを持っている事を知った。ほとんど誰もが検査をすすめた。そう言わなかったのは桜井だけだった。
　電車とバスを乗り継いでの帰り道、潤一は桜井の言っていたことを考えていた。「必要がないからしゃべらない」のと「未発達」だけどそれにしたって素人の判断である。いつまでも同じ状況なら医師の所に相談に行くべきだろう。

　その日、信子は公園で小沢さんと話をしていた。
　花村一家が住む巨大な団地は、大都市の北の方角の丘陵地帯に造成されたものだ。団地を一歩外に出ると、古くからの田園地帯が広がっている。かつての名残は団地の敷地の微妙な起伏と、かつては少し小高い山で今は平らに造成された公園に残る松林ぐらいのものだった。就学前の子供を持つ親たちは、大抵この広い公園へ散歩や遊びに子供を連れ出していた。
　信子はむこうから軽く挨拶をしながら小沢さんが裕樹君といっしょに近づいてくるのを、なかば「心を決めて」待ち構えた。いつも出会う時にひっかかる気持ちの正体を、今日こそ暴いてやろうと思ったのだ。
「おはようございます」
「おはようございます。裕樹君、おはよう」
　そして…
…小沢さんはまた奈々子を覗き込む。そう、この観察しているような眼が…
「奈々ちゃん、大変ですか？」
「え」
信子が奈々子を見ると、奈々子に裕樹君がが何ごとか呟いている。四人は陽射しを避けるように藤棚まで歩いていった。
「なにか奈々子、おかしいですか」
　しゃべりながら信子は耳朶がかっと熱くなるのを感じていた。
「間違えてたらごめんなさいね。一年前の裕樹と同じ雰囲気がするものだから…」
「裕樹君と？」
「そう、裕樹ね、全然しゃべらなかったの」
　…。
「あ、ごめんなさい。余計なおせっかい…いやなんにも知らないで失礼だわね。ごめんなさい」
　四人は藤棚に腰を下ろした。すぐに裕樹と奈々子が藤棚の横の松林の斜面のほうへ駆けて行く。親たちは二人を見ながら話始めた。
「実は…そうなんです」
　信子は奈々子の状況を説明した。
「で、育児書だとかを引っ張り出して、どこが、何が悪いのかいろいろと考えて、出来ることはやっているつもりなんですけど…。夫も義母もちょっと遅いだけだって言ってるんです。だけど、さすがに夫も心配になってきたみたいなんですよ」
「うちもそうでしたよ。今はあんなでしょ」
　裕樹が斜面の石垣にかぶさるように伸びているリュウノヒゲを前に、なにか奈々子にしゃべっている。
「ほっとしたのはいいんだけど、今度はうるさくて。ははは、親なんて勝手よね」

「なにかなさったんですか？検査とかカウンセラーとか」
「ななちゃんも大丈夫ですよ」
　小沢さんは信子の問いには答えないで菜々子を見ながらそういった。
「病気だったら、ああいうふうには遊べないと思うの。ほら見て。しゃべってますよ」
　裕樹の熱弁に答えて奈々子の口が動いている。だけど、たぶん言葉ではない。信子はそう思った。
「正直、裕樹が駄目ならって夫と二人で腹を括りました。だけどね、子供の味方って親しかいないでしょ。周りや本人がどう思おうと。だから、そのままを受け入れようって。しゃべれようが、しゃべれまいが」
「そうですね。親が受け入れてやらなければ、子供はますます固く閉じていくのかも」
…なにごとか裕樹君に言っている奈々子。わたしはひょっとしたらもっと深く耳を傾けて聞いてもいないのに「言葉じゃない」と決めてしまっているのかもしれない。わからないじゃないそんなこと。それに例え言葉じゃなくてもそれでもかまわないじゃない。わかってあげよう…
「個人差はあるし、何がきっかけでしゃべりだすかわからないし…。テレビとか大人の会話とか聞いてるでしょ。凄いわよ、覚えてくスピード。でね、うちのしゃべらない原因も冷や汗モノだったし」
「なんですか？」
「わたしの早口と短気」
「ああ…」
「裕樹がしゃべる前にわたしがしゃべっていたのよ。で、裕樹はしゃべることを諦めてたみたい。ある日、夫がのんびり相手してたら、のんびり答えが帰ってきて、で、今に至るってわけなんです」
「あっ！」そういって小沢さんが裕樹君に声をかけて、立ち上がった。
「裕樹！やめなさい！」
　裕樹君が石垣にへばりついてリュウノヒゲをひっぱってむしっていた。奈々子もそれを見上げている。親たちが駆けつけると、ふたりはきょとんとしてそれぞれの親をみあげた。
「裕樹、なにしてんの。だーめこんなことしちゃ。ねえ、花村さん、子供を信じるのとアタマにくるのとはまた別ですよねえ」
小沢さんが苦笑いをしている。
「見せて」
開かれた裕樹君の手には違う種類のリュウノヒゲの葉が握られていた。ひとつは艶のある濃い緑の葉で、もう一つは白い線が入っている少し薄い緑の葉だった。
「なーに、これ」
「くさ」
「あー、くさね。だめよこんな、引っこ抜いちゃって」
　信子はその様子を見ながら奈々子に向き直った。奈々子は嬉しそうな顔をして同じくニ
種類の葉っぱを信子に差し出す。
「まぁ、ありがとう。なんですかねー、これは」

それから信子は小沢さんに言われたアドバイスを思い出しながら絵本を開いて、奈々子と一緒に見ていくようになった。アドバイスとは、できるだけゆっくりと語りかけること。動物や乗り物、食べ物、植物、人の名前…。

　次の日は日曜日。とても冷え込んだ朝だった。起き出してきた奈々子をあやしながら潤一が言った。
「ぼくらが神経質過ぎるのかな」
　昨晩の間に、潤一は桜井の話をし、信子は裕樹君のことを話した。
「うーん、昨日の奈々子見てたら、すぐにでもしゃべりだしそうなんだけど」
　潤一は椅子に据わりマグカップで珈琲を飲んでいた。膝の上には奈々子。信子は朝食の準備である。ベランダには朝日が差しこみ始めて、ハーブ類の緑が輝き出している。その隣の魚子薔薇も光をその葉に受け始めていた。
「魚子薔薇はまだまだだね」
「もう少し暖かくならないとね。だけどこの薔薇、四季咲きだから、ベランダはいつも花ざかりになると思う」

「うん、それはいいよね。夏だけは色が真っ白になるらしいしさ」
「あ、そうなの」
　潤一は奈々子もベランダの外を見ていることに気がついた。
「ななも見てるのかぁ。きれいだねーお外」
　奈々子がふっと強い目で潤一を見た。
「ななこ」
奈々子の口から突然、言葉がでた。
「そうだよね、ななちゃんはななこだものねー」
「ななこ、ななこ」
奈々子は嬉しそうに連呼を始めた。
二人は思わず顔を見合わせ息をのんだ。
「ななちゃん、おしっこかな」
いつもは首を振るかうめくような声で意思表示をする奈々子がはっきり言った。
「ちがう」
「あ！違うんだ。奈々ちゃん違うんだ！」
　信子と潤一は興奮していた。奈々子が初めて言葉で意思表示をしたのだ。慌てたのは信子だ。口をぽかんと開けたまま、どたどたと奈々子のもとへ走った。
「おみじゅかなー、じゅーちゅかな」
「おみじゅ」
　初めて「お水」と言った！
「うわーっ、おみじゅだおみじゅだー」
　子供用のコップに水を八分目までいれて、信子は奈々子の口元まで持っていった。ぐっぐっと奈々子は力強く水を飲んだ。
「うわんぐわんにゅぐぁー」「？？？？？？？」
「じゃれているんだよ、信子」
　潤一は狼狽する信子を見た。目尻が赤くなっている。
「ちがーう」また奈々子が言った。
「なーに。なにがちがうのなーに。なーに」
「ああうあう、ななこはねーななこはねー」
「どうしたの」
「ななこわぁーーーななこわぁーーー」
　奈々子はきゃっきゃっといいながらベランダに出た。
「ちがう、ななこ」
　そういって魚子薔薇をゆびさす。
　そして自分の胸に手を当てた。
「ななこ」

（了）

雷

雲がたくさん浮かんだ空のした
犬の遺骸と山をのぼった

まっしろな急坂には　いが栗がいっぱいに落ちていて
わたしたちはけっして滑らなかった

最後に触れた白い躯にねぎらいの言葉をかけて
まわりに家の花を敷き詰めた

煙の気配をしみこませながら
指から流れる汗を独りで見ていた
喉仏をまんなかに　箱を閉めて　抱きしめて
家に帰る
まばらな光の　峠の向こうで
雷が響き始めていた

草の音

　金曜日の夜、仕事を終えたぼくは、まっすぐに車で妙子の家をめざした。市街を抜けて国道一号線を南下し、ある交差点で右折する。
　と、あたりはいっぺんに闇が濃くなる。人が歩いていない。
　前進していくとすぐに、忘れ去られたかのような静かな土地になっていく。国道の轟音と光に慣れた耳と眼がゆっくりと興奮を鎮めていく。
ほとんどが畑である。ぽつりぽつりと倉庫が立ち、もっとまばらに人家がある。さらに進むと闇の一段と濃い帯が見えてくる。淀川の堤防である。その上は全開の夜空。
　妙子が一人で住んでいる家はその真横にあった。

　午後８時を過ぎていた。
「酷い顔してる」妙子の笑顔が待っていた。
「そりゃ、一週間分の疲れがね、どっと」
　ぼくも笑ったつもりだった。
「遅くなったね。ごめん」
「お疲れさま」
　玄関から小さなキッチンへすすみ、ぼくたちはふたりだけのささやかな夕食を始めた。
　妙子が用意してくれたのは魚の形をした瓶の赤ワイン、いろんな種類のフランスパンとチーズ、ほうれん草のサラダ。それに鯛のカルパッチョ。カルパッチョに乗っているディルの香りが漂っていた。
　お互いの仕事の話や友人たちの話をしながらの食事の時間は、ゆったりと過ぎていった。

「かたづけるよ」
「うん」
　二人で並んでシンクの前に立つ。洗うのはぼくで拭いていくのは妙子だ。食器は妙子が揃えたもののほかに、ふたりで陶器市で買った大皿や小皿など。それぞれを買った時のことはすぐに思い出すことができる。
　こうやっていくつも想い出を積むようにして生きてきた。
　かたわらの妙子を見る。
　もう何年こうやってきただろう。二年、三年、…。

「どうしたの」
「いや」
　二人が黙ると遠くから轟音の残骸のような音が響いてくる。国道を走る車の、音の塊だ。夜の通低音のように低く途切れずに。耳を澄ませていると川の流れる音にも気がつく。そして、いつしかこれらの音が消えていく。最初からなかったかのように。だけど間違いなくふたりはその音の川に挟まれているのだ。

　妙子は染織作家を目指していて、個人の作業スペースを確保するためにこの家を借りて住んでいる。ぼくはずっと北の市街に住み、そこで働いている。そして週末にここに会いにくるのだ。ぼくの部屋でも会えるけれど、ぼくはこの家が好きだった。すみずみまで妙子の「手」が入っている事が好きだった。

ぼくらは同じ高校に通い、その時からずっと付き合っている。そして卒業してから十年が過ぎていた。

ふたりで食器を片付けて、テーブルを拭く。静けさだけが広がっていく家。
風の音がした。風が堤防の草を渡っていく音だ。波のように、駆けるように。強く弱く、まるで夜の息のようにも思える音だった。
それから二人はゆっくりと抱き合う。ちいさい灯りだけをたよりに、お互いを求める。
いとおしい人と、時を忘れ、全てを忘れ、手を伸ばし、相手だけを確かめながら。
それから闇の中へ落ちていくように眠る。草の揺れる音、ずっと家を撫ぜていた音に抱かれるように。

胸にとまっている妙子の手の重さで目を醒ました。風の音が唸りをあげていた。
まどろみのなかで、二人の間に小さなもう一つの命がいたら、と突然思った。ここにもう一つの命が眠っていたら、と。
想像の中でその子が目を醒まし、妙子にじゃれていく。
草の揺れる音が強くなった。
いとおしさだけで妙子とずっと暮らしていく事ができるのだろうか。
部屋にさしこむ光が上半身を照らす。
そうじゃない。できる、できない、じゃない。そう生きるんだ。
目の横に妙子の頬があって、指でつつくと、起きてるよ、と目を瞑ったままで言う。立ち上がって窓を開け放ち、目の前でうねる草と、その弾く光の粒を見ながら、川から吹きこむ風を浴びた。
堤防を散歩しようと言った。妙子は化粧のない綺麗な顔で黙って笑った。
草の音が一段と高くなり、玄関を開けると、視界の全部が草の緑と葉翳の黒に埋め尽くされ、それらが光の粉を振り撒きながらうねっていた。草の中、堤防を上っていく。
強い風によろめいて握ってきた妙子の手が瘠せているのに気づいた。光が降り注ぐ堤防で、見渡す限りふたりだけだった。草の音だけが鳴っている。
ぼくは妙子の瘠せた手を握りしめた。もうこの手を離さない。思いが口からこぼれ出した。
「なぁ」
「なあに」

（了）

時折、白

爪を切る音　鏡台から空へ
椿葉の鎮まる庭に　昏い光
空に折れ線でもあるのだろうか
　　山折れか　谷折れか
音が止むと　時が折れて
白が降るのだという
障子を少し開けて
箱庭に降る光　手鏡に載せて
白い三日月を丸い化粧の外に置き
折った膝の間には
夜が待っており

夕刻の手鏡が火を吹いていて
時はとっくに折れており

温かい雨

＃１　無憂樹（むゆうじゅ）

「すん」と背後で低い音がして自動扉が閉まると、体に暖かな空気がまとわりついてきた。横殴りの雪の中を歩いてきた頬のこわばりがみるみる緩んでいく。
　こちらを見ている受付の女性達からは「寒さ」を感じることはない。彼女たちはこの温室と真冬の街を毎日往復しているのだろうけれど、冬の街に出たときにどんな顔になるのだろうと一瞬思った。寒さにこわばった表情がないままに季節を過ごしていくのかもしれない。
　入場料を払い次の扉の前に立つ。
「すうん」
　扉が閉まると同時に濃い緑の大ぶりで不思議な形をした植物たちに、ぼくの眼は引き寄せられていく。
　小さな声がした。登世子さんが黒いカシミアのコートを腕に抱えて立っていた。細い体に薄手の黒のタートルとダークグリーンのプリーツスカート。ぼくの大好きな眼と髪と口と耳が少しかしいでこちらを見ていた。
「待ちました？」
　登世子さんは、ここならいくらでも待っていられるわ、と答えて腕を組んできた。一週間ぶりのデートのはじまりである。これからゆっくりと、広大な植物園の温室を散歩するのだ。

「ねぇ、無憂樹が咲いたんですって」
　入り口で聞いたという。彼女は一人で頻繁にこの温室に通っていて、職員とも顔見知りになっているのだ。デートのたびにまず彼女の口からこぼれるのは新しい植物や開花した植物の話題だった。
「どこにあるんだろう」
「うん、少し先」
　通路は交叉し曲がりくねりながら続いていて、ぼくたちはゆっくりそこを辿り始めた。

　ぼくたちはそれぞれ自宅で植物を栽培している。ぼくはミニ薔薇ばかりを、彼女は観葉植物を主に。同じマンションの同じフロアの別の部屋に住んでいて、ベランダに出ると、左手の向こう側に彼女の部屋のベランダが見える。
　お互い独りで暮らし、毎日育てている植物を気遣い、花に溜息をつき、葉の緑に鎮められ、新芽に興奮し、病気や害虫を呪う。そんなことを何年も続けてきていた。

　登世子さんは七十歳で独身である。その年齢を聴くと誰もが驚くほどの容姿の人。いつも姿勢がいい。たぶん四十代のぼくよりも数段いい。同じ園芸店で何度も出くわし、同じエレベーターで何度も乗りあわせ、ぼくたちは自然に言葉を交わし出したのだった。
「あなた、いつもミニ薔薇を買ってらっしゃるけれどお好きなの」
　それがぼくらの最初の会話だった。ぼくはエレベーターの中で通算十二個目になる黄色いミニバラの鉢を手に持っていた。

「せっかく鉢に入っているのだから、夜は中にいれるか覆いをかけておやりなればいかがかしら。私のところからずらりと並んだあなたの薔薇が見えるのよ。寒い晩ほどはらはらしてしまいます。ミニは弱いでしょう？」

　ぼくの頷いた顔はどんなだっただろう。彼女のきりっとした口元が綺麗だと、瞬間に感じていたから。
「『せっかく鉢に』？」
「根がついたまま移動できる植物は、空を飛べる猫みたいなものなの」
　そして彼女はにこりと笑った。
　ふたりはそれから出会えば立ち止まって話をするようになり、あたりまえのように付合いを始めたのだった。

ぼくたちは温室の熱帯水性植物の部屋を進んでいく。右手にオニバスの池が見えてきた。
「きれいね」
　オニバスは見事に咲いていた。ピンクと紫の中間の色をしている。
「あなた、蓮の咲く時の音を聞いたことがある？」
「いいえ」
「よく音がするっていうでしょう。この蓮は古代の種から復活した蓮だから、もし音がしたら同じ音が古代にも鳴っていたことになるわよね」
「過去と同じ音…ですか」
「遠い過去が目の前によみがえるのよ。聴きたくない？」
「それじゃハスの種は楽譜でもあるわけだ」
「なるほど楽譜ね。…うん、じゃあ聴きにいきましょう。夏にね。マンションの近くのお寺に蓮があるの。あそこで聴きましょう」

「いいですね」
「夏にね」
　蕾が弾ける音。たとえばミニバラの咲くときでも、人の耳には聞こえない微細な音がしているはずだけれど、蓮の大きな蕾は開く時にはっきりと音がするという話は聞いたことがある。ぼくは無性に聴きたくなった。

　しばらくオニバスを見ていた。水底は真っ黒な泥で、水面を破り伸びている茎と、葉と、花。その色と形とがまるで空中に浮かんだ奇蹟のように見える。空中と水中の対比はあまりに鮮やかだった。
「完璧ってこういうことなのかしら」
「完全、と思います」
「手の入れようがないというか…。だけど自然のものは全部完璧なのよね、それぞれの形でね」

　順路は右にカーブしてゆっくりとした登りになった。肉厚の大きな濃い緑の葉たちが続く。そして熱帯植物の花の色は目を刺すように鮮やかだ。どんなに小さな花でも強烈に存在を主張してくる。登りのいちばん上のあたりに「無憂樹」と呼ばれている樹があった。
古代のインド。この木の下で麻耶婦人はゴータマシッダルタ、つまり仏陀を出産したのだった。そして「無憂」という名がつけられている。それはオレンジ色の繊細な花をつけていた。葉は大きく濃い緑。木の下は緑の深く濃い翳。
「これなのね」
「熱帯の花は雌蕊や雄蘂がむきだしというか、繊細な部分がくっきりとしてますね」
「大胆なのよ」
　登世子さんがぼくの眼を見た。

　上で何かの気配がした。見上げると、鉄骨と硝子の屋根を水が流れていた。外で降りしきる雪が解けているのだ。

無音。
頭の真上から水が流れ落ちている。
「まるでカプセルの中にいるみたいね」
　登世子さんも見上げていた。

＃２　春萱（はるかや）

　鴨川の朝靄がゆっくりと晴れていく。
ぼくたちは早朝に二人で河川敷を歩いていた。これから川沿いに水辺の植物を採りにいくのだ。朝日が登世子さんの銀色の髪を輝かせている。

前の晩、登世子さんがぼくの部屋を訪ねてきた。珍しいワインが手に入ったからいかが、と。ワインと一緒にリンゴとゴルゴンゾーラチーズを持って。
　その時、花の香りの話題になった。ミニバラもこれだけの数が部屋で開花するとけっこう香りが漂うというようなことを言ったのがきっかけだった。
「ばらの香りはわたしも好き。なんだかしあわせな気分になる香りよね」
　それから、金木犀、沈丁花、木蓮、…と次から次と香りのする花の名前を挙げてはあれはどう、これはどうと思いつくままにしゃべっていた。
「登世子さんの部屋はオーナメンタルグラスばかりだから香りは無いでしょう」
　オーナメンタルグラスとは、簡単に言えばススキであるとかヨシのような植物のことである。それらの葉の緑の色の違いや形の違い、質感の違いなどを楽しむ「オーナメンタルグラスガーデン」を登世子さんは作っているのである。以前に呼ばれた時に見せてもらった。ベランダの外まで硝子張りに改造された居間からのスペースの植物は、緑の抽象画をみるようだった。重なり合った葉の緑の色相の違いや、眼に受ける硬軟の感触が部屋に風を起こすような錯覚を覚えた。

「ふふ、それが違うのよね」
「香りがあるんですか」
「部屋には無いけれど、川に行けばね。明日の朝行きましょう」
　登世子さんの顔が少し紅く染まっていた。

　川面が光の鱗のように輝き始めた。朝凪はとうに終わり、川辺の草たちが風を受けて、囁くような音を出していた。
「あ、あれあれ」
　登世子さんはそう言うとすたすたと河原に向かって降りていく。慌てて追いかけた。河原に自生している剣のようにすっと長い草を三本、登世子さんは根もとから剪定鋏で切り取った。
「春萱（はるかや）というのよ」

　登世子さんから手渡されたその「草」はなんの香もしなかった。

「ほら」
　そういわれて河原を見てみるといたるところに萱が自生していた。
「でも香りがしませんけれど」
「帰ってからのお楽しみ。あなたの部屋に行ってもいいかしら」

　春萱の葉をテーブルの上に置き、珈琲を淹れる準備を始めた。今日は日曜日。四月の終わり近く、薔薇たちは蕾をぐんぐん膨らませているところだった。
　朝の音が部屋に流れこんでくる。車の音、川の流れる音、風の音、鳥の声、遠くから人の声、ラジオの声、テレビの声…。
　朝の光も溢れ出している。テーブルに腰掛けている登世子さんにくっきりとした翳ができ、壁に飾ってあるクレーのレプリカも色の境界が消えていた。
　登世子さんが眩しそうに目をつぶっている。
　ページュのロールスクリーンを少しだけ下ろした。
　お湯が沸き、ペーパーで珈琲を淹れ出す。インドモンスーンの香りが部屋いっぱいに広がった。二人並んでマグカップで珈琲を飲み出したとき、ぼくは「ちがう匂い」に気づいた。
「なんだろう？」
「ふふふ」
マグカップを手に部屋をみまわし、匂いを発しているものがわかった。春萱の葉だった。河原に生えている時はまったく匂いはしなかったのだけれど、折ってしばらくたった今、甘い芳香を放ちだしたのだ。
「匂いの『お茶うけ』ですね」
「わかる？」
「だってこれ桜餅みたいな匂いだもん」
　登世子さんがにっこり笑った。

＃３　　蓮

七月も半ばを過ぎ、京都のあちこちで蓮の開花が始まっていた。ぼくたちは真冬の植物園の温室で約束した法金剛院へ見にいくことにしていた。ぼくは蓮のことはほとんど知らなくて、お寺に行けば蓮の開花の音も聞けるものと思っていた。けれど出かけるその日の朝、ぼくの部屋に来た登世子さんは首を横に振るのだった。

　登世子さんはミルクティーを呑みながら蓮の話をはじめた。
「蓮が蕾から咲くのはもっともっと早い時間なの。念のためにお寺に電話して開門の時間を聴いたのよ。午前七時だって。たぶん無理ね。でも、花を見たいから行きましょうよ」
「仕方ない、か」
「ね。私が蓮の開花を見たのは京都じゃないのよ。滋賀県の田舎の小さなお寺。山門を入ってすぐのところに蓮鉢がずらりと置いてあって、山門はいつも開きっぱなしだったの。田舎じゃないとそんなふうにはできないんでしょうね」
「街じゃ無理なんだ…。音が聞きたかったんだけど」
「そこの和尚さんは『音はしない』ってきっぱりと言うのよ。確かに蓮の花はね蕾が割れて咲くんじゃなくて、少しづつ緩んで咲くの。だからいつでも音がするとは限らないと思う
「だけど登世子さんは聴いたんでしょう」
「うん、夜明け前にね。ぽんっ、て。幸運だったのね。だけどそれでも和尚さんは違うっていうのよ」
登世子さんは自分の頭を指差した。
「その音は『ここ』でしたんだって。だから正直に言うとね、聴いたかどうか自信がないの」

　夏の朝は、いきなり強烈な光線とともに始まる。ぼくたちが妙心寺の境内を抜けて花園駅前まで出たとき、二人の翳はかなり濃くなっていた。そのまま少し西へいくと法金剛院がある。有名なお寺ではあるけれど門構えはいたって簡素だ。幾人かがその門をくぐっていくのが見えた。カメラを肩から下げている人、スケッチブックを抱えている人、皆この蓮の花を記録し、持ちかえろうとしている。
　「蓮の咲く音」というのはなんともロマンティックなものに思えていたのだけれど、入場料を払い、その庭の池を見て、これが一斉に咲き出す時に仮に音を出したら、さぞかし賑やかなことだろうと思った。それほど池は蓮でいっぱいだった。
　それは池一面を覆う緑の波だった。その曲線のままに固まってしまった波だった。花はその狭間に浮かんでいた。あるいは波の切れ間から茎が伸びたその先に咲いていた。池の周りをめぐる道にも蓮鉢が置かれ、見事な大輪の蓮の花がいくつも咲いていた。
　よく見ると蕾のものもあれば、開きかけのものもある。咲いて四日で散るという短い命の、今どの辺りなのか、花の一つ一つを見ながら、花の持っている時間を読んでいった。
「やっぱりね」と登世子さんが言う。
「この花はもっともっと微妙なものかもしれないわ」

　蓮の花はその形がシンメトリックでしかも花びらのひとつひとつが完璧な曲線でできている。理論や数式ではなく、

直観で、これ以上の「線」は描けるはずがないと感じる美しさ。

「そう、だから、くっきりとした音が不似合いに思えるの」
「やっぱり音はしない、と…」
「あってほしいけれど…。そんなはっきりした音だと『線』が壊れてしまう気がする…」

　ぼくたちはゆっくりと池の反対側の日翳のほうへ歩いていった。
「わたしねこの景色も好きなの」
池の端で登世子さんはしゃがみ、そこから蓮の葉を指差した。
　横に並んでしゃがんで見ると、蓮の葉の裏から空を見上げた恰好になり、視界が薄い緑に染まった。
「なんだか落ちつくの。緑の傘の下にいるようでしょう」
「緑の波の底にいるみたい」
「うん」
　登世子さんの顔に緑の紗がかかり、目元がはっきり見えなくなった。

「和尚さんがいうように、蓮の音は私の頭の中でしていたのかもしれないわね。滋賀のお寺には好きだった人のお墓参りに行ったのよ。命日にね。
夜が明ける前からずっとお墓の前にいたの。だから自分でもわからないまま、きっと蓮の花に何かを求めていたんでしょうね」
　ぼくは黙って聴いていた。
（…過去の音がよみがえる…）

　結婚はしなかったけれど、８年間、その人と生活をともにしていたという。登世子さんは婦人服のデザイナーとして働いていて、彼も同じ業界の人だった。
　そして彼はある日、突然交通事故で亡くなったのだった。

「突然、消えてしまったのよ。声も顔も体も指も。突然。ある日、突然…」
　沈黙が緑の波の底に沈んでいく。
登世子さんはごめんなさいと小さな声で言うと立ち上がった。ぼくはすぐに彼女の手を握った。そうして、ゆっくりと蓮の池の周りを歩き始めた。大きく広がった緑の翳のなかを選ぶようにして歩いた。

　やがてふたりはまた日向へ出てきた。ちょうど池を一周したことになる。ひときわ立派な蓮が鉢で咲いていた。真っ白である。
「なんの汚れもないわね」
そこには見る者から言葉を奪う、完璧な美しさが光に向かって開いていた。
　時間が経ち、人が増えていた。みんな小声でしゃべるものだから、さわさわさわと風が集まったように聞こえる。ふたりはお寺を後にすることにした。
「また来ましょう。何度でもこれるもの」
　門の外の通りは、たくさんの車が行き交い、夏の光は、ゆらゆらと揺れはじめていた。
　視界が白い。人の姿も蜃気楼になりそうだ。
　ぼくは登世子さんに言った。
「ちょっと向こうまでいきましょう」
「うん？どうするの」
「古い傘やさんがあるんです。日傘、買いましょう」
「あら、帰ればあるわよ」
「ぼくの傘をさして欲しいんです」
　目を細めて登世子さんの方へ向き直り、顔をしっかり見ようとしたら音がした。ぼくのなかで何かが弾ける音が。
（終わり）

散髪

庭に木の椅子をだして
髪を切る
耳の端が宙を感じて
上を向く

日傘が塀の上を滑っていく
静かに 静かに
「耳、切れますから」

庭に渦が現れる

ダリア畑

　ミドリの大学からの帰途に、古いお寺の土塀に沿って湾曲している道があった。その道に面して、三日月の形をした土地に家が建っていた。土地の幅の脹らんだところに家屋が建ち、前後の尖った土地が庭になっていた。一方には多くの盆栽を載せた長い棚があり、そこでおじいさんが手入れをしているのをミドリはよく槙の垣根の隙間から見ていた。そしてもう一方の尖った土地は白い金網のフェンスで道路と仕切られていて、ちょうど畳を五枚横に並べたような花壇になっていた。そこの手入れはおばあさんが担当しているらしく、花柄を拾っていたり、寺の境内から飛んでくる落ち葉の始末をしているのを見かけた。そこでおじいさんは見ることはなかった。

　この、おばあさんの花壇をミドリはひそかに「ダリア畑」と呼んでいた。その花壇にはダリアしか栽培されていないのである。ダリアが生育している時以外はなにもない。その有り様がミドリには花壇と言うよりまるで「畑」に思えたのだった。
　一回生のミドリが初めてこの花壇の前を歩いた時には、まだ花のついていない名前のわからない植物が勢いよく生育していた。そして７月、激しいほどの「強い色」の花々が咲いたときには、思わず立ち止まって見入ったほどだった。紫、黄色、朱、白…。それらの組み合わせ。花弁の形も様々で、細長いもの、小さな花びらが幾重にも重なったもの、花全体が球体のものなど、その多種多様さは見ていて飽きることがなかった。

　おばあさんと言葉を交わしたことはないけれど、その花を見てからは、花壇が気になって、必ず見ることにしていた。だから玄関先を掃いていたり、「畑」で作業しているおばあさんとは何度も目が合い、自然と黙礼を交わすようになっていた。
　そして花壇（畑）には相変わらずダリア以外はなにも栽培されなかった。

　一ヶ月ほど花が咲いた後、ダリアはすべて切り戻され、十一月に再び花をつける。冬になるとそこには何の痕跡もなくなってしまうのだ。たぶん、球根を掘りあげているのだろうとミドリは思っていた。

　そして真冬。焦げ茶の土の上に石灰がまかれ、土と混ぜ合わされている。ある時は藁が刻まれて撒かれていたり、時には生ゴミを混ぜた土が野良猫に掘られていたりする。
　そんな様子をミドリはずっと見ていた。

　３回生の夏にもダリアは見事に開花した。その頃、帰り道は純一と一緒にいることが増えていて、ミドリはこの「ダリア畑」を純一に紹介した。純一は古い寺の横に隠れたようにある、ダリアの花園に驚いた。
「ダリア以外は何も植えはらへんねん」
「贅沢やなあ」
　それからまるで通学路のようにその横を二人で歩いた。ちょうど私たちが歩く時間帯が老夫婦の作業時間と重なるらしく、しんとした寺院横の道は、家近くだけが賑やかな音に溢れていた。ぱちん、ぱちんというおじいさんの剪定鋏の音、おばあさんが畑を雑草を抜いたりして整えている音。そして鳥の声。
おじいさんの手入れしている庭には百日紅と梅の木があった。その枝には蜜柑の輪切りがよく刺してあり、鳥たちがついばみに来ていたのだ。

小さな異変に気がついたのは純一の方だった。それは「ダリア畑」のほうではなくて、反対側にあるおじいさんの盆栽の棚だった。

「ちょっと変やね」
　純一は、盆栽がずいぶん荒れていると言う。
「もっと緑が濃かったんとちがうかな。隙間からしか見えへんけど、枯れてるようにもみえるねんけど」
　そういわれてみれば、ミドリもおじいさんの姿を庭で全く見かけなくなっていた。
「どおしはったんやろ」

　一方の「ダリア畑」では十一月に再び花が咲いた。いつもならおばあさんが満開の花を切り戻していたのだけれど、今回はだらしなく放置されて、そのまま立ち枯れてしまっていた。老夫婦に何かあったことは間違いなかった。
道から音が消えていた。

　そして、冬がきた。

　年が明け、授業が再開。
重い冬曇りの日だった。微かな光のなかをミドリが歩いていた。遠目に「ダリア畑の家」のほうがひときわ明るく感じられる。そのわけが知りたくて庭や家を凝視した。すると、家の前が綺麗に掃かれていた。それをことさら感じるほど家はしばらく手入れがされていなかった。やはり老夫婦には何事か起きていたに違いない。
ミドリの心は躍った。

　家に近づくにつれて、さらに家の明るさは、増し、庭に原因があるように見えてきた。ミドリは槙の垣根の大きな隙間から庭を覗いてみた。枯れた観音竹や松の盆栽が見えた。まだ生きている椿や梅の鉢もある。その日は分厚い雲に覆われた、冬枯れの空気が漂っていたけれど、庭で琥珀色がちかちかとしている。首を傾げて中を見ると、ガラス戸のある縁側があった。ガラス戸は開かれ籐の椅子にもたれたおじいさんがいた。その横にぺたんと座ったおばあさんもいる。二人とも微笑んでいた。
（いや、元気やったんや）
二人の視線が同じものを追っていた。

ミドリの前に名前も知らない小鳥が十羽以上いた。
　縁側を降りて庭に進む途中に石の水盤がおかれていて、そこに数羽、その周りに灰色に古びた板でできた餌場に数羽、地面に数羽。地面には芝が張られていて、その上にたぶん今しがた撒かれたのであろう、餌が散らばっている。小鳥たちは小刻みに動き、囀ることも忘れて一心不乱に餌をついばんでいた。その背中がこの薄暗い日の、光という光を集めてきたように輝いていた。

　二人の目がとても優しくて、ふたりとも一回り痩せたようにも見えた。
　鳥たちを追う二人の目が、覗いているミドリの目とあった。会釈したけれど、小さな隙間だからむこうから見えたのかどうかはわからない。ミドリは頬が熱くなって、垣根から離れた。

　餌を食べ終えたのか背中から鳥たちの囀りが聞こえてきた。まだ完全じゃないけれど、道に音が戻ってきた。
母屋の前を足早に通り過ぎ、「ダリア畑」の横に出る。枯れたままのダリアは綺麗に掃除され、いつもの冬の焦げ茶の土地になっていた。また夏に花が咲く。

（了）

あとがき　２００５－２０１２

２００５年のあとがき

「音函」は「光函」を引き継ぐように詩「冬の光」という作品から始まります。そして、私たちの人生に現れる様々な「音」をテーマに短編小説を書きました。短編はインターネット上で発表されたものですが、推敲したものを収めています。詩作品は、「光函」以降、短編と同時期に生み出された作品を収めています。全て婦人公論へ投稿した作品です。
出版のチャンスは限りなく少なく、自費出版をするにしても時間と経費がかなりかかるという問題を抱え、しかし、より多くの方に読んでいただきたいという思いが高まる中、今回の方法に行き着きました。
本を出したいというモノカキの願いと、本を出せる人はとても少ないという現実とのジレンマから生まれた苦肉の策でもあります。初めての本作りの経験ですから不細工な点も多々あると思いますがご容赦ください。
手にとってくださり、ありがとうございました。

２００５年　１０月　　西原正

２０１２年のあとがき

電子書籍化するにあたり、紙の本と違い画像の制約が自由になることを利用したいと思いました。画像はすべてオリジナルです。蓮の画像は法金剛院で撮影しました。しかしながら、特に詩などは画像がイメージに枠をはめてしまうように感じられ、あえてつけるのをやめました。その結果、画像はごく限られたものになってしまいました。
作品たちの向こうから音が聞こえてきますでしょうか。もしそうであるなら幸いです。

２０１２年９月　　西原正